

「特別な教育ニーズのある生徒に、高等学校はどのような支援ができるか」

話題提供 (県立浦和工業高等学校 森 真美)

タイトル「生徒教員ともにメリットある『授業のユニバーサルデザイン化』」

1 本校の現状

2012年に文科省が公表した調査結果では小中学校の6.5%の児童生徒に発達障害の可能性があるとされたが、そこから10年が経過し、現場での感覚では更に増加していると思われる。医療機関での診断に結びついていないが学習や生活上の困難をもった生徒も数多くいる。本校では5年前より県の専門家による巡回支援を始め、それら生徒の困り感を理解し個別に対応してきたが、学校全体として生徒に対応するため、以下の取り組みを行った。

- 2 学校全体の取り組み ① 教育相談委員会組織の再編 ② 生徒情報の共有化
3 課題

高等学校では様々な特性により授業や学習に困難があっても、教員側の示す基準に満たないと単位を修得できず、原級留置や転退学を余儀なくされることも多い。この基準の元になる授業や考査について、同じ教科であっても専門分野の違いや経験等、教員によって違いがあるのが高等学校の特徴でもあった。しかし変化への対応が苦手な生徒にとっては担当教員や指導方法が変わる度に「何をどう頑張ればよいかわからない」状況をうみだし、力が発揮できず、生徒・教員双方のストレスを生み出していた。また、発達障害の生徒の中には空間認知が苦手な機械製図の理解が難しい場合や、設備製図で定規を使って真っ直ぐ線を引く事が難しい生徒もいる。実習でわからないことがあっても、自分から先生や他の生徒に聞きに行くのが苦手な生徒は作品が完成できない、3～4時間連続で行う実習の時間が苦痛になってしまう等、工業高校特有の困難性もある。これらのことから、一人一人の教員が自己の専門性を活かしながらも、さまざまな特性をもつ生徒が安心して学習に臨める授業すなわちユニバーサルデザイン化された授業を行うことが、生徒教員ともにメリットあることではないかと考えた。つまり、「個々の生徒の学習満足度を上げ、自己肯定感を育むメリット」と「授業での理解度を上げ、授業外で個別対応する生徒の数と教員の負担感を減らすメリット」である。

4 授業のユニバーサルデザイン化

(1) 教科学習でのユニバーサルデザイン化

①板書1枚で済む量に精査。②生徒自身が論理的思考を進める上で手助けとなる厳選された問いの工夫。③苦手意識を持つ生徒や得意意識を持つ生徒それぞれに「やったらできた」を実感できる課題の設定の工夫。④自信をもって自身の考えを発表できる環境づくり。⑤自信と意欲が持てる具体的な声掛け。⑥「classroom」の活用や動画視聴・パワーポイントなどICTも利用。

(2) 工業系科目での工夫

①定規を使って真っ直ぐ線を引く練習等の個別支援→1年生全員に線引きの練習から始めるワークシートを独自に作成。②実習授業後のレポートは書く量をできるだけ少なくする工夫。③長期欠席の生徒など、実習に参加できなかった場合の補習。④数学感覚・数字感覚が難しい生徒へは、最終的な正答や自力での公式暗記の能力にこだわらず、やり方を理解している点も評価。

5 最後に：授業のユニバーサルデザイン化を行うために不可欠なもの

- ・情報収集 ・教科内の共有